

# 東京商科大学教授中村為治の生涯とロバート・バーンズ

照山顕人

## 1. 序一消息を求めて

中村為治（1898-1991）の名を知る人は少ないだろう。いわゆる大学人としての学者経歴は短い。しかし彼が外国文化の受容という点で日本に与えた影響は計り知れないものがある。しかも彼の業績の多くは大学を離れ乗鞍岳の麓であこがれ続けた農夫という身分のもとになされたのである。

為治は日本におけるスコットランドの農民詩人ロバート・バーンズ（Robert Burns, 1759-96）の研究の第一人者である。岩波書店から『バーンズ詩集』を1928年に上梓し、その後日本で初めてバーンズの全訳詩集<sup>(1)</sup>を出版した。彼の翻訳は研究者の間では正確無比との評判で盛名をさせている。また1934年には研究社の英米文学評伝叢書の一つとして『バーンズ』を著し、バーンズの生涯を当時の最新の資料をもとに綴った。さらに1961年には研究社刊の『英米文学史講座 第6巻 18世紀』に「バーンズ」を執筆し、詩人バーンズと彼の詩やソングについて論じたのである。為治を通してバーンズが日本で本格的に紹介されたといっても過言ではない。

為治の全訳以来、バーンズの詩は久しく翻訳されなかったが、筆者が所属する日本カレドニア学会<sup>(2)</sup>では、1998年ロバート・バーンズの翻訳を主たる目的とする「ロバート・バーンズ研究会」を内部組織として立ち上げた。16人のメンバーでバーンズ詩の約8割を選び、2002年10月に国文

社から『ロバート・バーンズ詩集』を出版することができた。バーンズの詩はスコッツ語で書かれているため訳出は非常に困難を極めた。難解な詩に対峙し、どうするかと考えた時、先人・先輩の翻訳に当たって手がかりを探るしか方法がなかった。明治以来さまざまな研究者や作家がバーンズの翻訳を手がけている。そのあたりの事情は、難波利夫の『日本におけるロバート・バーンズ書誌』（荒竹出版、1977）に詳しい。国文社版翻訳の際、一番参考にしたのは為治の『バーンズ詩集』と『バーンズ全訳詩集』だった。他の担当者も同様の状況だったと推察される。岩波文庫のものは入手しやすいが、角川の全訳は古書店などで見つけるのが難しい。幸い大きな図書館に所蔵されていることが多く、比較的容易に参照することができた。参考資料の少ない時代にこれほどの正確な訳がつけられたことは驚愕に値する。

バーンズの翻訳をしながら、中村為治という人物に尋常ならざる関心が湧き、翻訳作業が終わり次第、調査にとりかかることにした。ところが、いざ始めてみるとほとんど資料はなく、途方にくれたものである。その時点で明らかになっていたことといえば、〔日本カレドニア学会に創設時からの会員であったこと〕、その時の古い名簿から、〔かつては東京商科大学の教授であったこと〕、〔長野県乗鞍山麓の安曇村番所に住んでいたこと〕、そして〔岩波文庫から、数冊翻訳があること〕程度であった。岩波文庫の奥付から、〔文庫が出た時には東京の西荻窪や谷保村<sup>(3)</sup>に住んでいたこと〕も判明した。

そのように情報の乏しい中で、生き証人を捜したが、日本カレドニア学会で為治と交流のあった会員はほとんど世を去っている。ただ当学会の発起人の一人であった小牧英幸と発会直後から会員になり数十年間代表幹事を務めた東浦義雄から、断片的な思い出を聞くことができた。また日本カレドニア学会は発会当初、学会誌を年3回発行しており、為治は第1号（1958年）から第4号（1959年）まで毎号寄稿している。さらに1968年の学会創設10周年記念号の「カレドニア学会の歩み」という記事の中で、

東浦が為治に触れている。これら日本カレドニア学会の学会誌が、為治自身とまた彼とバーンズの関係を知る上での非常に貴重な資料となった。

為治がかつて教授として勤めていた東京商科大学、現在の一橋大学には大学関係の資料が残っていた。人事課に為治の履歴書が保存されており、彼の学歴や職歴が大まかに理解できた。また学園史資料室からは、為治が勤務していた頃の東京商大の様子を映す資料が多く提供された。一橋大学が創立100周年を記念して編纂した『一橋大学学問史』（1986）では元一橋大学名誉教授山川喜久男が「一橋英語百年の歩み」という題でそれぞれの英語教師のプロファイルを書いている。さらにかつての教え子たちが同窓会誌、記念誌等に寄せた回想録もすばらしい資料となった。

この調査と平行して家族探しも行った。為治は日本カレドニア学会会員時代には乗鞍岳山麓の安曇村番所に住居を構えていたが、その地が為治の故郷だったのか、あるいは晩年に新天地を求めて移り住んだのか、皆目見当がつかなかった。ところが為治のエッセイの中に乗鞍に触れたものを見つけ、そこには、三男が「木立山荘」という民宿を建てたことが記されていた。インターネットで検索をかけると木立山荘で数件ヒットし、三男の名前、住所、電話番号を知ることが出来た。三男の禮治れいじに連絡を取り、埼玉県在住の次男、美治はるじを紹介してもらった。美治とのインタビューによって東京商大以後の為治の人生を知ることができ、また為治自身が晩年したためた自伝『楽しい自叙伝<sup>(4)</sup>』の存在を教えられ、それは本稿をまとめるのに最高級の資料となった。2003年5月には初めて乗鞍の木立山荘を訪問し、その後も訪れるたびに禮治夫妻や為治と親交のあった近隣の人々から話を聞く機会に恵まれたことは幸いであった。

手に入れることのできた資料の限りをもとにして、東京商科大学を退職するまでの為治の経歴を紹介し、為治とロバート・バーンズについて、そして為治の乗鞍の生活について本稿を進めていきたい。

## 2. 東京商科大学教授就任までの為治

為治は1898年1月17日東京の銀座に生まれた。履歴書によれば、本籍は東京府東京市京橋区銀座3丁目22番地、身分は平民となっていた。13人兄弟の長男で上から2番目であった。父親は文治といい、もともとは新潟でろうそく屋を営む本間家の次男だった。美治の話では、文治は兵隊に行くのを嫌い、中村家に養子に入ったそうである。1877年、16歳の時上京し1887年にはヨーロッパとアメリカを旅行した。帰国する時に石油採掘機械の日本総代理店の権利を取得した。この渡航については『幕末明治海外渡航者総覧<sup>(5)</sup>』にその名前を見つけることができる。そして日本で初めてロータリー式石油採掘機械を輸入した。母親は名前をゑいといい、相当な名家の出であった。ゑいの父親、吹田四郎兵衛は大阪の三井の番頭かしらをつとめたが、明治になって上京し、現在日本橋の日本銀行のある場所に店を出した。為治が子供の頃は文治の店も大繁盛し、書生や女中が何人もいる非常に裕福な家庭だった。生活様式は当時としては珍しく西洋式だった。

1904年神田一ツ橋にあった東京高師附属小学校に入学。自宅の築地明石町から通った。1910年東京高師附属中入学。同級生には木内良胤（外交官）、藤島逸人（佐々木信綱の子息）、神田盾夫（神田乃武の子息）、堀内敬三（音楽評論家、音楽之友社創立者、浅田飴オーナーの子息）、渋沢敬三（留年して為治と同学年になった。日銀総裁、大蔵大臣。日本民俗学の父）らがいた。中でも神田盾夫とは一番仲がよく、日曜日の度に神田の家に遊びに行っている。神田は父親の影響で英語が堪能で、2人は英語で文通した。神田は後に東大教授となるが、しばらくして国際基督教大学設立に係わり、後にその教授になった。聖書やギリシャ語を専門とした。

中学時代、為治が好きだった科目は地理、博物、物理、化学、図画で、天文や自然に対して興味を持っていた。クラシック音楽もよく聴いた。また中学時代には思春期のなせるところか何かしら不満を抱くようになり、

学校や教師に対してもめごとを起こすこともしばしばであった。例えば友人と二人で大嫌いな担任の墓を作り、ばれて友人が退学処分となったり、3年生の時修身の試験答案に「家を建てる大工には家がなく、機を織る織女には衣なし」と書き、思想が不健全だといって叱られたりした。また4年の時修身の試験で「天皇は神聖にして犯すべからず」という意義を説明せよ、という問いに対して為治は「天皇は神聖にして犯すべからずということはない。神聖なのは創造主なる神ばかりだ」と書いた。修身の教師は為治を退学させることを強く主張したが、教師の一人が弁護し、すんでのところで退学を免れた。父親はそれに感謝して南房総の富浦に水泳部の宿舍を寄付したという。

1916年9月一年浪人の後、一高入学。2年生の時に一年留年し、1920年3月卒業。同級生には神吉三郎、川端康成がいた。川端とは一緒にゴムまりベースをした。後年の同窓会の写真に為治らと一緒に写っている。川端が自殺した時、「馬鹿な奴だった」と語ったそうだ。2年生の時に留年した原因を「聖書に熱中しすぎたから」としているが、聖書に関心を持つようになったのは、中学3年の時、内村鑑三の『独立短言』を読み感動したことに始まる。その後為治はもっぱら内村の著作を読むようになった。同じくキリスト教に関心を持っていた神田盾夫とおそろいの聖書を買って毎朝早く学校に行き、2人で聖書を読んだ。高校2年の頃から神田とともに内村の柏木の集まり、すなわち聖書研究会に通うようになる。柏木の会の名簿に神田の名前はあるのだが、為治の名前は見つけれなかったから、正式な会員にはなっていないかと思われる。この頃ギリシャ語で聖書を読みたい一心でギリシャ語文法の勉強を始めるのだが、ギリシャ語とラテン語には終生関心を抱き勉強を続けた。

1920年4月東京帝国大学文学部言語学科に入学。そこでギリシャ語とラテン語の単位を取って卒業しようと思っていたのだが、ギリシャ語・ラテン語が単位にならないことになり、2年生の時に英文学科に転籍する。しかしギリシャ語とラテン語の勉強は続け、英語よりも力を入れて勉強し

たことがうかがわれる。1923年3月に卒業。卒業論文は英語で書いた「A Study of Milton's Paradise Lost」だった。参考書は一冊も読まず、思ったままの感想に梗概をつけて出した。自伝には卒業論文の一部が掲載されている。

卒業を間近にひかえ、就職を考えなければならない時期になると、為治は恩師の市河三喜には相談せぬまま、甲府の中学校が英語教師を募集している掲示を見るとすぐに応募して決めてしまった。為治は自伝の中でこう書いている。「後で市河三喜先生にあったら先生は、『君はもうさっさと自分で決めてしまったのかね。』ときかれた。私は『ええ』と答えた。私はある程度の月給さえ取れば、どこで何をしていてもいい。先生に頼んで強いて高等学校の先生にしてもらわなくてもいい。実力さえあればまたどうにでもなつてゆく。夏目漱石だって中学の先生をしていたではないか、と考えた。<sup>(6)</sup>」この頃父親の事業もうまくいっておらず、名誉も地位もなく、家族を養わねばならぬという意識だけが先行していたのかもしれない。

山梨県甲府中学校に教諭心得（月俸135円）として就職したが、美治によれば、為治は東京帝大出の学士がそのようなところに就職するものではないと言われたそうである。そのため1923年7月31日に辞職し、9月1日市河三喜の斡旋で私立神戸関西学院に文学教員として就職する。9月1日に関東大震災に見舞われて、東京が壊滅状態となったため、神戸に行くことは「ちょうど都合がよかった」と為治は言っている。

神戸に発つ前、8月30日に山添孝<sup>こう</sup>と結婚した。孝は、内村鑑三の門下生、黒崎幸吉の姪で、為治が黒崎の主催する聖書研究会にも顔を出していた関係で知り合った。大学を卒業する少し前に婚約したものと思われる。結婚式はキリスト教式で司式は、やはり内村の門下生、畔上賢造がつとめた。

神戸では、神田盾夫が東京帝大の言語学科から京都帝大の言語学科に転入し、当時京都に住んでいた。また石川欣一が大阪毎日新聞社に勤めており、この2人とは頻繁に行き来があった。

1926年4月1日市河の推薦で、東京商科大学附属商学専門部講師並びに予科講師として就任するため、3月関西学院を辞職した。その時生徒たちは盛んな送別会をしてくれたと為治は回想している。洋服一式から帽子、靴まで作って贈ってくれたそうである。東京商大は初任給月俸150円だった。4月10日に教授に昇進した。1931年11月30日には専門部を退き予科専任の教授となった。

### 3. 東京商科大学教授時代の為治

神戸から東京に戻ると西荻窪に家を建てた。しばらくすると、国立学園小学校に通っていた子供の通学と自分の通勤のために、西荻窪の家そのままにし、新たに大学のすぐそばに家を建て引越しをした<sup>(7)</sup>。西荻窪時代、東京商大予科は国立ではなく石神井にあり為治は徒歩通勤していた。予科が小平に移ってから、徒歩通勤には西荻窪より国立のほうが都合よかったのである。

一橋大学の隣にある国立学園小学校とも為治はなじみが深い。この学校は東京商大が神田一ツ橋から国立に移転した際、教職員も一家でこの地に移住できるようにと、当時、国立一帯を開発していた箱根土地株式会社のオーナー、堤康次郎が1926年に創立した小学校である。為治はその国立学園の校歌<sup>(8)</sup>を作ったのである。同校の前校長神林照道はこの時の経緯を次のように話してくれた。「昭和10年国立学園は2月11日を締切として父兄に対して校歌の歌詞を募ったところ、為治もそれに応募した。応募総数は26点だった。2月28日の選考で為治は1等を獲得し、為治の歌詞が校歌に採用された」とのことだった。この校歌は今も歌われ続けている。

為治は動物が非常に好きで、西荻窪でも国立でもたくさんの動物を飼っている。国立では、山羊、ブタ、鶏、チャボ、家鴨までも飼育していた。為治の家は大学のすぐそばにあったため、学生の間ではいろんな動物を飼っていることで有名だった。一橋大学名誉教授細谷新治は1934年に東京

商大予科に入学したが、2年生の時に為治に英語を習った。細谷も為治の自宅付近を通るといろいろな動物が山ほどいたと回想する。

3人の子どもたちも当然自然児で、飼っている動物と遊び、生き物についての知識は学者顔負けとの評判だった。当時の朝日新聞がそんな中村一家を取材して写真入で記事にしている。切り抜きに日付が入ってないため、特定はできないが、記事の中にある子どもたちの年齢からして1936年のものであろう。見出しは「“蛇なんか友だちだ” 動植物では専門家を驚かす 変わった国立の三少年」となっている。記事では、「大人でも嫌がる蛇を平気で捕らえたり植物の分類にかけては一寸した専門家もたちぢになるという変わった兄弟の三少年が国立学園小学校に通学し校内のみでなく近所の人気者になっている（後略）」と紹介されている。当時の国立はようやく開発の手が入ったばかりで、一面雑木林だったこともあり為治はさまざまな動物を飼うことができたのである。

為治の隣には東京商大の教授だった山口茂が住んでいた。といっても、この一帯は開発が始まったばかりでまわりには住宅もなく、およそ500メートルほど北に位置していた山口宅が民家では一番近い隣家だった。山口の子息で神奈川大学名誉教授の山口徹は為治の子どもたちと同年代であり、小さいころの遊び仲間だった。山口によれば「敷地は200坪くらいあり、生活様式は西洋風だった。為治の通勤のいでたちは、スーツにリュックを背負うというものだった。帰宅時にはその中に買い物一杯詰め込んで、うちの前を通る時に、どこどこのお店の〇〇〇は安かったよ、などと声をかけていった」ということだった。

大学での為治は、『一橋大学学問史』に書かれた山川喜久男による「一橋英語百年の歩み」に詳しい。「卒業論文が『A Study of Milton's Paradise Lost』であり、初めての著書が『抒情英詩集<sup>(9)</sup>』であったことからもうかがえるように心から英詩を愛好したロマンチストであり、学生からも同僚からも『為さん』の愛称で親しまれた<sup>(10)</sup>」とある。

東京商大に赴任した時、為治は弱冠28歳。学生にとっては若き「兄貴」

という存在で、とても先生という印象ではなかったようだ。予科では30歳前でも教授という肩書は珍しいことではなく、また専門部ではかなり年を取った学生もいたため、学生からすれば非常に親しみを覚える教師であったのである。東京商大には先生たちの名前を織り込んだ全10番の数え歌があり、その9番に為治が登場する。「九つとせ、クラスメートか中村さん、およしよ六等高等官<sup>(11)</sup>」と歌われている。履歴書によれば「高等官六等」に叙されたのは1928年であるため、その頃の作品ではないかと思われる。為治はその若さゆえ、とにかく学生には人気があった。卒業生、立石信吉は次のように述べている。

先生は東大英文科を卒業せられてまもなく当校に赴任されたので、まだ二十五歳くらいの若者であった。中学を卒業したばかりの私にとっては、年若き兄貴分という感じでとても先生という実感は湧かなかったが、却って親近感を覚えた。又その実若さに溢れた熱血漢という感じで、英文学の講義も楽しく、その時間が待ち遠しい気持ちであった。

クラスの担任であったので授業時間以外のふれあいも多く、休み時間などには校庭の芝生で生徒と共に車座となり、人生を語り、又、時には映画芸術を論じ、我々は実に愉快的青春のひとつを共に過ごしたのである<sup>(12)</sup>。

また中山舜吾は次のように回想している。

先生というよりは兄という感じで、授業が終われば一緒にバスケットボール、食堂の喫茶店でコーヒー、と今の学生ではちょっと考えられない、本当に心温まる師弟関係で卒業後も、先生には大変失礼だが「為さん」の愛称で呼ばせていただき、楽しく懐かしい学生時代を思い出している<sup>(13)</sup>。

もう一つ専門部の思い出集『国立・あの頃』でも為治の人気は抜群である。

当時国立駅を通る列車は本数が少なく、乗り遅れると大変だったという。これについて成田安清が次のように書いている。

又この列車に乗り遅れそうになると、今は信州の山麓で晴耕雨読の優雅な生活を送っておられると聞く、我が愛する為さん（英語の中村為治教授）を引張り降ろして、各自持参の弁当を開きながら喫茶店で課外授業を実施されたこと等が今でもはっきりと眼底にやきついている<sup>(14)</sup>。

また品川哲山は「為さん事英語の（寧ろ英詩のシンガー・モダンボーイ）中村為治先生、あんな陽気で元気な先生見た事がなかった。今どうしておられるや<sup>(15)</sup>」と振り返っている。

為治は学生とはずいぶん仲良く遊んだが、同僚ではなかなか友人ができなかった。唯一の友人は、後に一橋大学の学長となる上原専禄だった。為治は上原との交友をこう述べている。

（前略）だが幸いにも一人の友だちを商大で得た。それは上原専禄だ。私が専門部に来た次の年に、上原は高岡高商から母校に戻ってきた。そしてまもなく私は上原と仲のいい友達となった。よく上原の吉祥寺の家に遊びに行った。上原は学者であって、色々と私の知らないことを話してくれる。一緒にホワイトのFirst Greek Bookを勉強した。それが済むと一緒に飯を食い、それから何だかんだと話をして夜をふかし、とうとう泊り込んでしまったことも何度かあった<sup>(16)</sup>。

上原とは家族ぐるみの付き合いをしていた。為治のアルバムには若かりし頃の上原、子息、令嬢の写った写真が数葉貼り付けてある。美治の話で

は、上原以外にもフランス語の山田九郎、だいぶ年上だったが内藤濯<sup>(17)</sup>などとも親しかったようだ。大学を辞めてからも為治は内藤としばしば会っている。

為治が専門部や予科で使った教材はヘロドトスの『歴史』、ソクラテスの『対話編』、ミルトンの『闘技者サムソン』、ブロンテの『ジェーン・エア』などだった。為治の回想では、初めの頃はステイーヴンソンなども使っていたが、その手のものは嫌いで、タキトスやクセノフォン、ソクラテスなどの英訳、聖書。それから『ゴールデン・トレジャリー』、『ウエイクフィールドの牧師』、『ジャングルブック』、『トム・ブラウンの学校時代』、『ハックルベリー・フィンの冒険』などを使った。また「よく謄写版で私の好きな英語の詩を刷って行って、それを教室で読んだり歌ったりした。また教室ではよく駄弁りもした。<sup>(18)</sup>」

授業の進め方は、学生を指名して訳読などをさせることをせず、一人で講義をした。『闘技者サムソン』の場合には自分の訳を学生に配布して講義をした。学生の回想録から、授業ではよくロバート・バーンズのソングが登場し、学生は大喜びしたことがうかがえる。学生だった木下光雄は「ブロンテの Jane Eyre を教わった。よく授業中に詩の話しをされた。バーンズの “My heart's in the Highland [*sic*]” を歌って聞かせてくださったことは今でも覚えている。<sup>(19)</sup>」また予科の学生だった横山健之輔は同窓会の文集で次のように書いている。

童顔の頬がいつも艶やかに赤くサンタクロースのようで、動物がお好きで、住居の囲りに七面鳥や豚や羊などを飼育されていた由。予科一年生の時から此の先生はヘロドタスの『歴史』をエヴリマンス・ライブラリーだが一応原書を教科書に使用され、あの細かい活字の本を、かまわずどんどん先へ読み進めて行かれたのは、中学を出たての我々には新鮮であった。此の先生の圧巻は何と云ってもロバート・バーンズその他のスコットランド民謡詩の朗読で、中でもかのロツホ・ロー

モン。先生、時に興に乗ると教壇の椅子に坐ったまま、身体を上下にゆすって遂には節をつけて歌い出すという場面があったと記憶するが、そんな時は実に楽しい教室であった<sup>(20)</sup>。

また羽深知治はこう述べる。

一橋に入学して、授業で中村先生の発音を聴いたとき、中学で教わってきたクラウンリーダーによる日本式英語とは、その発声法が全く異なっているのを知った。特にあのスコットランド民謡“Coming Through the Rye”（ライ麦畑にて）を歌いつつ発音の正確さを教えられたのは、全くすばらしい教授法であったと思う。このスコットランド民謡は、日本の明治以来の唱歌“故郷の空”〈夕空晴れて秋風吹き……〉の原曲で、私もそのリズムを知っていたので、英語の原曲も何の苦労もなく覚え、全曲を英語で歌ったと共に、英語の発声法も中学時代のそれとは全く異なったものになったのを覚えている。その後、社会人になっても、しばしばこの英語の民謡を口ずさんだものである。

このように、唱歌によって英語の発声を教えられた中村先生の印象は、今なおスコットランド民謡〈Gin a body meet a body coming through the rye ……〉と共に私の胸に深く刻まれている<sup>(21)</sup>。

さらに松尾弘は「英語の歌詞のままスコットランド民謡を歌わせることの好きだった変わり者の中村為治先生<sup>(22)</sup>」と描写している。

細谷新治が習った時のテキストは聖書だった。細谷によると「為治はテキストを読むのではなく、節をつけて朗詠した。そしてお決まりのようにバーンズのソングが登場し、為治が自己流にメロディーをつけて歌った。やはり誰も当てずに、一人でどんどん進めていった」そうである。しかし当時語学の授業のやり方は、どの先生も同じで、学生を指名することはなかったようだ。細谷は、担任だった西川正身にも英語を習っているが、テ

キストはH・G・ウェルズの『トーノ・バンゲイ』で、学生を指名することとはせず、文法の細かい説明を行うなど、マイペースで授業を進めた。ドイツ語の教授も然りであった。

為治は1943年10月30日付けで大学を辞める。45歳だった。東京商大の予科や専門部ではようやく65歳定年制が定着しつつあったが<sup>(23)</sup>、それにしても45歳は早すぎる。その2年後には東京も捨てて乗鞍に籠もるのである。何故この若さで辞めたのか、またなぜ東京を離れて乗鞍という自然の厳しい山奥に隠棲してしまったのか。自伝を見ると、辞めた理由を「恩給がついたから」と書いている。事実、恩給がついたその月に辞めており、自伝に次のように書いている。「学校の方は、恩給もついたので、多年の宿願どおり、恩給のついたその月九月の二十五日にやめてしまった。<sup>(24)</sup>」<sup>(24)</sup>「学校というものは、教室で自分の読みたい本を読むという楽しい時を除いては、全く私の性に合わないところだった。<sup>(25)</sup>」美治の語ったところでは、大学では教授会が一番苦痛でいやでいやで仕方がなかった。何もすることがないのでその時たばこを覚えたという<sup>(26)</sup>。また「教えることも好きではなかった」とも話していたようだ。

それでは何故教師になったのだろうか。先にも述べたが、甲府の中学校で教師になることを決めたとき、「高校の教師にならなくてもある程度月給さえ取れればどこで何をしてもいい」と言っている。この為治の言葉には人生に対する前向きな野心が感じられない。どちらかと言えば、まわりの環境に妥協するような消極的な姿勢ともとらえられる。これは為治が東大卒業の頃から父親の仕事が行き詰ってきたことに原因があるのではないかと考えられる。とにもかくにも早く給料を取りたい一心で、恩師の市河に相談もせず、そそくさと就職を決めたのだろう。「学校から貰った月給百三十五円は全部そのまま父に渡した。父はその中から三十五円を私にくれた<sup>(27)</sup>」という記述があるように、父親を援助しようと給料の大半を供出したのである。

神戸時代にもかなりの金額を父親につぎ込んでいる。1930年頃には、

東京商大以外に青山学院や予備校にも出講し、父親の事業の援助をしているのである。また渋沢敬三が斡旋した翻訳などの仕事も行うようになっていた。それでも生活は苦しかった。大学は辞めたくて仕方がなかったが、少なくとも恩給がつくまで辞めるにも辞められなかったのであろう。

また英語の教師という職業についてこのように述べている。「英語の先生になったのも、ただ妻や子供たちを養ってゆく必要に迫られてなったまでのことで、先生を自分の天職だなどとは一度も考えたことがなかった。<sup>(28)</sup>」為治は学校というところはまったく自分の性に合うものではないと感じていて、当初より恩給がついた時点で辞めようと思っていたのである。だから恩給がついて辞めた。と、理屈は合っているのだが、東京商大を辞めようと思っていた頃、為治はこうも言っている。

昭和十七年の秋には目黒にある国民精神文化研究所に三ヶ月間研究生として通った。嘘で固めた国民精神文化であった。(中略)その時研究生の一人に、附属の後輩で、一高のドイツ語の教授をしていた、下田弘がいた。そして下田は私を一高の生徒主事に呼びたがり、そのことを安倍能成校長に話した。私もこの話には乗り気になっていた。安倍氏にもその自宅で会ったりした<sup>(29)</sup>。

結局この話は実現しなかったが、矛盾しているのである。学校の先生はいやだといいながら、一高には食指を動かしている。東京商大はだめで、一高ならばよいということだろうか。確かに恩給がついてから辞めたというのは事実である。しかし何らかの原因でもっと早く辞めたかったのだけれども、父親の事業を考慮し、恩給がつくまで辞められなかったというのが本音ではないだろうか。為治は学生からは非常に慕われ、彼自身も学生に尽くしてもいたということが自伝から読み取れる。「学校は自分の性に合わない」という理由で辞めたとは思えないのである。2年後に民間会社を経て、東京を後にし自然の厳しい乗鞍の山奥に移住するのだが、その理

由もわからない。東京商大を辞職したことと同じ直線上にその原因があるのだろうと推測はできる。東京商大在職中に起こった外因的あるいは内因的な事件がその事由となったのではないだろうか。

外因的な事由としては、戦局が考えられる。一橋大学の人事課で当時の教員の異動を調べると、為治と時期をほぼ同じくして10人の英語教師が辞めている。その前後の東京商大全体の人事異動からすれば、英語教員の異動は確かに多い。学生が学徒出陣などでいなくなったためか、英語が敵性語であったためか、或は内紛か、様々な可能性が考えられる。しかし敵性語だったことを理由とするのは問題外のような。東京商大に限らず当時の大学は戦争中でも、学生数が減ったり、やや授業時間が減少したりしたものの堂々と英語の授業は行われていたからである。元一橋大学名誉教授佐々木高政は次のように回想している。

そうこうしている間にも、戦局はますます変てこになって参ります、軍当局のかけ声は次第にヒステリックにつり上がり、学校の出席簿の学生の名前に（応召）と書き込まれて、空席が目立ち始めます。学徒勤労働員ということで、軍需工場やら農村やらに出掛ける楽しみも（仕事は適当に、食事はタップリだったからであります、しかも男子は不足する一方ですので、学徒の大切にされたこと涙ぐましいほどでございました）増え、それにつれて学校の授業時数も減って、口に出しては申せませんがそれはそれは気軽な日々でございました。英語は敵性語というわけで、ずい分いじめられました、この学校では戦争中もずっと週に2時間か3時間は英語の授業を続けておりましたし、英語劇などもやっていたように記憶しております<sup>(30)</sup>。

敵性語と言って英語を授業でやらなかったのは、中学校などのもっと下の教育機関だったようである。したがってそれが理由で大学から英語が一掃され、それにともなって、英語の教員がリストラされるということもな

かったのである。英語教員の異動は単なる偶然かもしれない。

また内紛も考えられる。為治の在職中に何回か大学内で騒動があったようだが、特に注目すべきは1935年に起きた「白票事件」である。何らかの内紛が為治の退職と関係があるとするならば、この白票事件である可能性があると細谷が示唆した。白票事件とは、教授会で某助教授の学位請求論文の審査報告と票決が行われ、白票7票でその助教授の学位取得が否決されたことに端を発した教授と助教授の対立であり、その後1.2年の間、大学が混乱した。細谷の記憶では為治が授業中、白票事件に触れることはあったが、感情的になったり、誰かを批判したりという態度はなかったという。事件は1935年、為治の退職は1943年であるから、事件が直接的な原因となったのではないだろうが、それに端を発した人間関係の軋みが尾を引いていたことは十分に考えられる。

為治が家族を引き連れて乗鞍に移住する時、3人の子どもたちは特に不満の声をあげはしなかった。しかし妻、孝はいわばお嬢さん育ちで、国立で何不自由なく快適な生活を送っているのに、なぜあんな山奥に行かなければならないのかという思いを抱いても不思議ではない。隣に住む山口茂の妻は孝と同年で二人はいつも行き来していた。孝は乗鞍に旅立つ前日、山口宅を訪問した。山口徹の記憶では、ずっと泣いていたという。そこまでして為治が東京を離れたと思うのは、尋常なことではない。やはり、東京商大時代に人間関係に精神的な大打撃を受けたからと考えるのが妥当ではないだろうか。自伝の中で乗鞍へ引っ越しの準備をしているときの日記に為治はこう記している。

つくづくと人間の浅ましさを思う。しみじみと私は世の中の人間でないことを思う。それでも私は真っ直ぐに私の道を進もう。こちらさえしんまで善くあるならば、世の中の人は大体その善い半面でつき合ってくれる。だがこの世とこの世の人に対しては、くれぐれも賢明に接触しなければならない<sup>(31)</sup>。

非常に意味深長な決意であり、心機一転、乗鞍では同じ轍を踏んではならないという思いが強く感じられる。

乗鞍の人々に、為治が大学を辞めた理由をどのように語っていたか尋ねたことがある。為治は、はぐらかしながら、適当に答えていたようだが、時に「大学で同僚とけんかをしたから」と答えたこともあったそうだ。単純に鵜呑みにすることはできないが、為治の辞職の原因が、学内での人間関係にあったことはまず間違いないと考えられよう。一高からの誘いに心を動かし、東京商大以外であれば教師を続けてもいいと考えたことが十分に理解できるのである。

#### 4. 為治とロバート・バーンズ

為治が小学校時代に住んでいたところは築地明石町、現在の聖路加病院付近である。明石町には1900年まで居留地があったため、その後もたくさん外国人が住んでいた。為治の姉は近くに住んでいた東京音楽学校教師アウグスト・ユンケルにピアノを習った。父親が洋行帰りの貿易商、近隣に大勢の外国人が住み、姉のピアノの先生はドイツ人という環境で育った。したがって小さいときから「異文化」に違和感はなく、英語の勉強を始めることに何の抵抗もなかったと思われる。

為治と英語の出会いは尋常小学校3年生、9歳の時である。姉とふたりで日曜学校の、国籍は不明だが、ハムブレインという先生のもとへ通った。いつ頃まで外国人のもとで英語を習ったか自伝には書かれていないが、通算3人の先生から英語を習ったようである。先に教え子の「授業で中村先生の発音を聞いたとき、中学で教わってきたクラウンリーダーによる日本式英語とは、その発声法がまったく異なっているのを知った」という回想を紹介したが、これはまさしく幼少からネイティヴについて英語を勉強した賜物と考えられる。

為治は東大の英文科を出たが、自伝に「別に英文学が好きなわけではな

く、英文学者になろうと思ったこともなく、(中略)だが英語の詩は好きで随分と読んだ<sup>(32)</sup>」と書いている。しかし詩人についてはかなり好き嫌いが激しく、一番好きなのはバーンズ、次にキプリングであった。『ゴールデン・トレジャー』や *The Oxford Book of English Verse* は肌身離さず持っていたようである。またバラッドにも関心があり、エリザベス朝の歌や詩は大好きだった。一方、ワーズワスやブラウニングは嫌い、シェリーは好き、シェイクスピアが厭で、ブレイクが好きだった。美治によれば、「ワーズワスは気取っている」と言っていたという。

為治がバーンズを知るようになった経緯は、日本カレドニア学会の学会誌第1号に詳しい。

バーンズの名前を始めて知ったのは、私の中学四年の時でした。教わっていた「ナショナルリーダー 四」の中に「オールド レッド サンドストーン」という一章がありました。そしてその中にバーンズと彼の「二匹の犬たち」のことが出ていました。

バーンズの詩集を買ったのは中学を出た年の夏でした。一九一五年八月十三日とその詩集に書き記してあります。紅い表紙のオックスフォード版のバーンズです。その時には、この本が五十銭だったかと思うのですが、七十五銭だったかも知れません。白がすりの着物を着て、はかまをはいて、麦わら帽子をかぶって、ほう歯の下たをはいて、買ったばかりのバーンズの詩集をあけて、やさしそうなを読みながら、丸善から京橋の方へと歩いていったのを、今も覚えています。この詩集は今年で四十三年私とくらしてきました<sup>(33)</sup>。

バーンズの詩集を買った経緯を自伝によって補うと、「中学を出た年に石川欣一の端書にバルンズ<sup>(34)</sup>の名前を見出し、*The Old Red Sandstone* のことを思い出し、早速丸善へ行って、オックスフォード版の紅い表紙の *The Poetical Works of Robert Burns* を一冊五十銭で買った。それは一九

一五年八月十三日のことであつた<sup>(35)</sup>」とのことである。

石川欣一は長じてジャーナリストとして活躍することとなる人物である。石川は為治の自伝にあまり登場しないため、詳しい関係は不明だが、為治が石川から英文学の面で大きな影響を受けていたように思われる点がいつかある。石川は1895年生まれで、為治よりも3歳年上である。小学校と中学校は為治と同じ東京高師附属。接点はいくらでもあつたはずである。石川のエッセイを読むと頻繁にバーンズの名前が出てくる。為治よりもずっと以前から、バーンズを読み、高く評価していたようだ。1929年為治は梓書房からキプリングの詩集を出版するが、石川は大正の末にはすでにキプリングを読み、エッセイなどで取り上げている。美治によると、為治は「石川欣一」と署名のあるキプリング詩集を持っていた。また為治は自伝の中でアルフレッド・ノイズについて、一項をもうけて書いている。ノイズは石川がプリンストン大学文科に留学していた時の教師で、石川はノイズに敬意を抱き、ノイズの方は石川に親しみを感じていた。石川のエッセイにはノイズがたびたび登場するのである。恐らく為治がキプリングやノイズを知つたのは石川を通してであろう。為治が西荻窪に住んでいた頃、近所に欣一の父親石川千代松の高弟である動物学者の篠原雄が住んでいた。動物好きだった為治の子どもたちは篠原宅に頻繁に出入りをしていたという。そんなところにも為治と石川の接点はあつたはずだ。バーンズについて為治が石川から大きな影響を受けていたことは間違いないだろう。

為治がいう『ナショナル リーダー 四』には、「オールドレッド・サンドストーン」や「二匹の犬たち」の掲載はなく、『ナショナル リーダー 五』にそれらしきものがあつた。しかしその読み物の名前は「オールドレッドサンドストーン」ではなく“My First Day in the Quarry”であつた。本文中にはBurnsと“Twa Dogs”だけが出ており<sup>(36)</sup>、それに付された注に““Twa Dogs”—*twa* meaning two—is a poem by Robert Burns, one of the best known poets of Scotland.<sup>(37)</sup>”と説明があるだけである。おそらく石川は端書でこの教科書に載つたバーンズに言及したのだろう。

中学時代の英語の教師は『英国の風物』（研究社、1940）を著した篠田錦作で、まじめないい先生だったと為治は振り返っている。中学を卒業してから為治は次第にバーンズに深く傾倒していく。内村鑑三の柏木の会で「内村鑑三先生がバルンズのヒランド・メーリイということを一と言われた時にも、ただそのことだけで、私はとても嬉しく思った<sup>(38)</sup>」と為治は記している。

一高時代にはさらにバーンズにのめりこんでいく。為治は「寮で、朝早く起きて、教室に行って、大きな声でバルンズの詩を読んだ<sup>(39)</sup>」。また当時為治はバーンズの歌に曲を付けて一人で歌っていたこともあった。また別の回想ではこう述べている。

高等学校の時代には、教室で他の本を読むことがはやっていました。私はある日、セーモールと呼ばれていた年よりの英人教師の時間にバーンズを読んでいました。セーモールがそれを見つけて、つつつかと近づいてきて、本を取りあげて、それを見て、黙ってもどして、一言も小言をいわれなかったことをおぼえています。そしてただ一言、これはむずかしい本だ、といわれましたが、私はその中のやさしい詩だけを読んでいたのです<sup>(40)</sup>。

大学を出た次の年の夏バーンズの翻訳に取りかかった。1925年の神戸時代である。為治は「ダンカン・グレーの中で『男さめれば女が燃える』という一行は私の妻が考え出した文句だ<sup>(41)</sup>」と言う。

毎日新聞の石川欣一の紹介で春陽堂に出版を依頼するのだが、断われ、東京に帰ってからさらに数編を付け加えて、1928年に岩波書店に持っていくとすぐに文庫本で出してくれることとなった。「我はバーンズを愛す」で始まる『バーンズ詩集』の序は非常に有名だが、為治自身も気に入っていたようである。学会誌『CALEDONIA』でも「あの有名な序文『我はバーンズを愛す。…』は銀座のキンビールでビールを飲みながら書いた

ものです」とまんざらでもない様子だ。また為治は岩波の『バーンズ詩集』の刊行部数について次のように述べている。「今から二十九年前の昭和三年に、岩波文庫の一つとして私の『バーンズ詩集』が出版されました。そしてそれが今までに十六刷三万六千部売れているのです。(中略)そして今もなお変わらずに毎年確実に千部の『バーンズ詩集』が出ていることを嬉しく思います。(42)」岩波書店によれば、2003年に重版を出版し現在では19版が出ており、累計刊行部数は約43000部(43)とのことだった。

1959年になると角川書店から『バーンズ全訳詩集』を出す。バーンズに対する愛情から、バーンズ生誕200年祭にあわせて、全訳の出版をしようと思立ったものである。この「はしがき」に為治のバーンズに対する思いを見ることができる。

私はバーンズの詩たちが非常に好きなのです。非常に好きだという以外にうまく私の気持ちを言い表す言葉はありません。それはただ好きだというのではなくて、非常に好きなのです。私はバーンズの詩たちを読む時、それらのものの中に純粋な真実な生命<sup>いのち</sup>を彼の心の比類のないよさを、はっきりと感ぜずにはいられないのです。

この四十二年間私はバーンズの詩集を手離しませんでした。それはいつでも私の喜びであり慰めでありました。二百年も前にスコットランドに生まれた一人の詩人の詩たちが、二百年後の今日一人の日本人にこれほどに愛されているということは、不思議なことのようにも思われるのです。だがそれは決して不思議なことではありません。彼は人間の心の美しさのはっきりとにじみ出ている詩たちを沢山書いてくれたのですから、二百年はおろか、今後何百年でも何千年でも、人類の続く限り、心の美しい人たちによって彼は愛されることでしょう(44)。

この全訳詩集はバーンズ生誕200年祭に日本からの贈り物としてスコッ

トランドに送られた。当時日本カレドニア学会の名誉顧問を務めていた市河三喜は為治の全訳詩集の完成に対して『CALEDONIA』3号に“Congratulations!”と題する「お祝いの辞」を寄せている。やや紙面を占有するが、全文を引用したい。

It was with exceeding pleasure that I offer Mr. Nakamura my hearty congratulations on the publication of his Translation of the Complete Poems of Robert Burns. I have had a small share in making clear for him some of the obscure words and phrases found in the original. Tameji Nakamura is, as you know, a rare and interesting personality. Born of a wealthy family in the heart of Tokyo, his school-days were passed in easy and enviable circumstances, but towards the end of his University life his father met with a reverse of fortune. After graduation he spent some years as Professor at the Hitotsubashi University. Then he resigned his post. It may be that the mountains called him—he bought a few acres of land on the slope of Mt. Norikura, where he built for himself and by himself a hut, very much like that of Burns, and started living a life of a farmer, tilling the ground and raising sheep and chickens. As Basho said:

“Fleas and lice;  
The sound of a horse easing nature  
At my pillow”.

But to our friend there is no place like this cot, where, identifying himself with Nature and Burns, he has spent many years in translating the poet. The result is, as may be imagined, is highly satisfactory and if the reader recites the poems aloud he will find that the translation can be read with a tone, so rhythmical they are. This

is but natural, for Mr. Nakamura is an amateur musician and read and read again the translated poems before he thought them fit for publication. We are pleased that the fruits of his labour saw the light in the time for the 25th of January last, the day of Burns' bi-centenary, when many Caledonian in Japan met together to do honour to Burns and Nakamura. The day, perhaps, was the happiest day of his life.<sup>(45)</sup>

また日本カレドニア学会は1959年1月25日為治の偉業を称えて新宿・高野で祝賀会を開いた。その時為治はバーンズのソングを独唱したと学会の記録に残っている<sup>(46)</sup>。

一高時代に授業中為治がバーンズを読んでいるところを英人教師セーモールに見つかり「これはむずかしい本だ」と言ったことは先に自伝から引用したが、バーンズの詩はスコット語で書かれてあるため、実のところ英国人にも難しいのである。為治がバーンズを訳したのは岩波の昭和初期と角川の昭和30年代だった。今よりはるかに参考文献が少なかったことは容易に想像できる。彼が翻訳する際に、不明な語やフレーズに対しては、先の引用にもあるように、市河が手を貸している。しかし最も頼りにしたものの1つは*New Standard Dictionary of the English Language* (New York: Funk & Wagnalls Company, 1914)であった。為治が亡くなったあと、彼の蔵書の一部は、山口徹の勤める神奈川大学に寄贈され、この辞典も含まれていた。表紙をめくると扉には「洪澤敬三君の高等學校入学を祝して之を贈る 大正四年七月 穂積陳重 阪谷芳郎<sup>(47)</sup>」と書かれている。おそらくこの辞典は洪沢が為治に譲ったものであろう。ハード・カバーの分厚い辞典がぼろぼろになっており、徹底的に調べ使い込んだ様子がかがわれる。

為治は角川版バーンズを出す時、岩波版を踏襲することを一切せず、新たに翻訳しなおした。角川版では岩波版にはない為治独特の表現や文体が

見られる。まず気がつくのは、名詞の複数形の「たち」である。複数形なら生物、無生物何でも「たち」なのである。その訳し方は日本語としてやや違和感があるのだが、為治はこの訳し方に信念やこだわりがあり、角川版の「はしがき」で次のように述べている。

原本は、Oxford Edition, The Poetical Works of Robert Burns, Edited by J. Logie Robertson, M. A. です。そしてこの本はその詩たちの順序も行数も何もかもこの原本とそっくり同じです。訳し方は逐語訳であり、極度に正確を重んじ、複数を複数であらわしてあります。私はこの訳し方を最上のものと確信しています<sup>(48)</sup>。

しかし中にはこの独特の訳し方が理解できず、難色を示す向きもある。ある高校の生物の教師が開設しているホーム・ページに「悪い翻訳あれこれ：自然科学書の訳本にはとんでもないものが」というタイトルのもと、為治が餌食となっていた。

中学生程度の翻訳と思われたのがバーバンク『植物の育成』8巻（中村為治訳、昭和30-37年）。3巻目まではまずまずな訳であるが、4巻目から突然、各節の標題も奇妙な逐語訳になる。4巻目の最初の節題は『東方と西方との源からのプラムたち』となっている。プラムたち？ いくら原語が複数形とはいえ、奇妙な語感である<sup>(49)</sup>。

『植物の育成』を見ると、文体が3巻の途中で急に変わっている。逐語訳にこだわるのは最初の著書『抒情英詩集』からである。為治はその「序」に「訳詩は出来るだけ明瞭であり、殊に出来るだけ文字通りならんことを期しています。各行も成るべく崩さずに其のまま訳し出しております<sup>(50)</sup>」と書いている。またその2年後に出された『ヴィクトリア朝の抒情詩』でも次のように述べている。

詩の訳し方は「抒情英詩集」に於けると同様、出来るだけ明瞭にして、出来るだけ文字通りならんことを期した。言ひ更へれば其は極めて逐字的な対訳なのである。そしてこの訳し方こそ最上にして唯一の本当の訳し方であると私は信ずる<sup>(51)</sup>。

しかし逐語訳は韻文では違和感はないが、『植物の育成』のような散文で使用すると「奇妙な語感」が発生してしまうのは必然かもしれない。

1928年に刊行した岩波版では複数形を「たち」と訳してはいない。角川版で全訳をするとき、正確さを期すためにもう一度日本語訳を見直した。そして複数形は複数形で訳し、語順は徹底的に文法どおり逐語訳にしたのである。その結果、語感に違和感が生じたことは否定できない。為治はバーバンクの『植物の育成』の後、カレルを翻訳し岩波書店に持ち込んだが、出版には至らなかった。また『バーンズ全訳詩集』の「はしがき」で、バーンズの全訳の出版を「多くの名高い出版者 [ママ] たちが拒絶しました<sup>(52)</sup>」とあるが、これらは恐らく為治独特の訳し方が理解されず受け入れられなかったためではないかと推測される。

例として、バーンズの原文と岩波版と角川版の「シャンタのタム」の最初の数行をあげておく。

#### 《原文》

When chapman billies leave the street,  
And drouthy neebors, neebors meet,  
As market-days are wearing late,  
An' folk begin to tak the gate;  
While we sit bousing at the nappy,  
And getting fou and unco happy,  
We think na on the lang Scots miles,  
The mosses, waters, slaps, and styles,  
That lie between us and our hame,

Whare sits our sulky sullen dame,  
Gathering her brows like gathering storm,  
Nursing her wrath to keep it warm<sup>(53)</sup>.

《岩波版》

夜店商人<sup>よみせあきんど</sup>町を去り、  
酒飲み仲間<sup>つど</sup>集う時、  
市日の夜は更<sup>ふ</sup>けゆきて、  
人々家路へ急ぎ行く。  
其の時我等強酒煽り、  
酔って楽しさ常ならず。  
我等と我が家の間なる  
遠き<sup>みちのり</sup>道程、沼地や池や、  
崩れ目、垣越し、心に浮かばず。  
家ではむづかし、むつつり女房、  
吹き寄す<sup>あらし</sup>暴風雨と八の字寄せて、  
冷させまいと怒を温む<sup>(54)</sup>。

《角川版》

露店商人たちが往来からいなくなり、  
酒好きな近所のものたち近所のものたちが集まる時、  
市<sup>いち</sup>の日たちが次第と暮れてゆき  
人々が家路へと急ぎ始めるとき。  
その時私たちは強いエイルを飲みながら座っている、  
そして酔っぱらって何とも言えず楽しくなる。  
私たちは考えない、あの長いスコッツ・マイルたちのことを、  
あの沼地たち、川たち、細い山道たち、また乗越階段たちのことを、  
それらのものは私たちと私たちの家との間にある、

そこでは私たちの不機嫌なむっつり女房が座っている、  
募るあらしのように彼女の額に八の字を寄せながら、  
それを暖めておこうと彼女の怒りを育てながら<sup>(55)</sup>。

「詩を味わう」という観点からすれば岩波版に、訳の正確さからすれば角川版に軍配があがるだろう。角川版を読むと英語の原文が頭をよぎるようである。

為治はどうして「たち」という訳し方にこだわったのだろうか。「たち」でなくとも「ども」という言い方も可能であろう。乗鞍に住む禮治によれば、「日常会話で複数形を“たち”と言っていたことはない。乗鞍でもそのような表現方法はない」ということである。

乗鞍にはたくさんの民宿やペンションがあり、その多くが独自のホーム・ページを開設している。その中で次のような文言に遭遇した。「大きく育った野菜達の持ち味を生かした料理を心がけています。おいしい野菜は、野菜達くれたプレゼントですからね。<sup>(56)</sup>」他にも写真のキャプションなどでもいくつか「たち」の表現があった。

2003年5月乗鞍を訪問した折、禮治の妻、かほるの呼びかけで為治と親交のあった主婦たち4人に為治の思い出話を語ってもらった。そのとき「たち」について質問をすると、二人から、特に生物を中心に複数形には「たち」をつけるとの情報を得た。乗鞍の方言ではないが、このような話し方をする人がいるようである。為治はそういう人々と交わる過程で、「たち」という表現を会得したのではないかと思われる。

バーバンクは長い歳月をかけて植物の品種改良を行う。その過程で次第に感情が移り、その植物を我が子のように感じるようになるのである。為治は次のように指摘する。

バーバンクにとって、例えば「すもも」は、普通の果樹栽培者または植物学者の「すもも」ではなくて、「私のすももたち」なのです。「私

の可愛い子であるすももたち、私の可愛い孫であるすももたち」なのです。バーバンクの訳者は訳してゆくうちに彼のこの気持ちに魅せられてしまいます。そして知らず知らず「私のすももたち」という気持ちで訳すようになってしまいます<sup>(57)</sup>。

為治も植物や野菜を育てていく過程で、バーバンクの植物に対する感情と自分の感情とが一致し、手塩にかけて育てた植物を、「キャベツ」とか「きゅうり」と呼び付けることができなくなっていった。乗鞍の人々が「野菜たち」とか「きゅうりたち」と呼んでいるのを知っていた為治は、その表現を『植物の育成』第3巻目途中から翻訳で使うのである。それはバーンズの全訳詩集を手がけている頃と同時期でバーンズの翻訳でも試みる。最初は生物に適用されていたものが、次第に無生物にも汎用されていたものと推測される。

長年関心を抱いていたギリシャ語やラテン語の翻訳でも徹底した逐語訳を適用している。山の雑誌『アルプ』に為治は次のように書いている。「スピノザの『倫理学』をラテン語から一字一字訳してそれを綴り合わせた。これは文字通りの逐字訳だ。<sup>(58)</sup>」山本書店の出版目録にはそのスピノザの『倫理学』を訳して出来上がった『羅和对訳スピノザ倫理学』（山本書店、1979）に対して次のような宣伝紹介文が掲載されている。「原文一字一字に訳語をつけ、その訳語を綴り合わせて日本文にした厳格な羅和对訳。原文の字数と訳文の字数がまったく同じであるので、スピノザのラテン文の日本語による訓読といえる。<sup>(59)</sup>」為治が複数形を複数で訳したり、逐語訳にしたりするのは、正確さを期すためのものであったのである。そのためには日本語の語調が少々犠牲になっても仕方がないというスタンスだったのであろう。そのためか、美治によると、生前為治は「俺の翻訳には絶対に誤訳はない」と常に語っていたという。

昭和53年為治は『アルプ』に「ロバルト・バルンズの数千枚の原稿も出来上がっていて、最後の読み直しももうすぐ終わる<sup>(60)</sup>」という一文を

載せている。為治はバーンズのソングと詩と手紙とを年代順に並べ、さらにソングには楽譜をつけて「ロバルト・バルンズ」を出版しようとしていた。楽譜とはジェイムズ・ジョンソン (James Johnson) の『スコットランド音楽博物館』(*The Scots Musical Museum*) に収録されている楽譜のことである。それについて『CALEDONIA』3号に為治は「Johnson's The Scots Musical Museum」という題で寄稿している。

この本は今から40年前にバーンズの伝記を始めて読んだ時から、私のほしくて仕方がない本だったので。去年リビングストーン氏がこの本をイギリスの図書館から借りて、私に貸して下さいました。私はとても嬉しかったのです。そして1,200頁ほどの本を始めから終わりまで全部写してしまおうと思って、その仕事に取りかかりました。けれどもその五分の二ほどを写し取った時、一つには写す紙が足りなくなったためと、一つには6ヵ月という期限に間に合いそうもなくなったために、一先づ計画を変えて、その中からバーンズの歌(譜がついているのです)だけを写し取ることにしました。そうしたら殆ど凡てのバーンズの歌(songs and ballads)に譜がついているので、私はびっくりしてしまいました。その数205編。更にバーンズが手を加えた歌、採集した譜が50編もあります。これらのものは既に全部書き写しましたから、これからその順序などをきめて、一つにまとめようと思っています<sup>(61)</sup>。

リビ[ヴィ]ング・ストーン氏はスコットランドの出身でブリティッシュ・カウンシルの東京代表を務めており、日本カレドニア学会の面倒をよくみると聞いている。東浦の回想では、為治が『スコットランド音楽博物館』を全部手書きで写そうとしていたことは、当時学会内で有名だったそうである。

この改訳は4巻本(B5変型判、各巻約800頁)で1983年に山本書店か

ら私家版として出版されたが、美治によれば、わずか2、3セットしか作られなかったという。バーンズについての為治の著作はこれが最後となった。

## 5. 乗鞍の為治

為治は東京商大の教授を辞めた時、はっきりとした将来への展望はまだなかった。ただ漠然と「静かに人間らしく暮らせる土地がほしい<sup>(62)</sup>」と退職後の早い時期から言っている。民間会社に再就職し、2年間国立を離れ熊谷の工場に単身赴任した。戦時中という時節柄、工場内の敷地に作られた畑でもっぱら農業に従事した。その頃の日記には「百姓をやりたい」という言葉がたびたび現れる。

1945年に乗鞍に移住する。他の土地ではなく乗鞍に移住を決めたのは、美治によると、「戦争で生きていけない、こんな所（東京）には生活ができない。長男の讚治は山歩きが好きで、いつも信州の山に入っていた。為治は、長男の“土地がもらえて、住むことができるのは番所しかない”という言葉にしたがって移住した。あの時代によそから乗り込んで土地を分けてもらって生きていけるのは番所しかなかった。自分で開墾したら自分の土地になった。」長男、讚治はこの時東京商大の学生で山岳部に属し、信州の山には精通していた。恐らく為治は農業さえできれば場所はどこでもよかったのだろう。

失意のどん底で都落ちしたわけではない。もともと自然志向が非常に強かったため、希望と夢を抱いて農夫の生活を心に描いていた。一年の半分は雪に閉ざされるため、半分は農業をやり、半分は好きな学問ができると楽しみにしている。実際彼の著作の多くがこの地でなされたのである。

しかし引越してから住む家や当面の食料の当てもなく、戦時中とはいえ見切り発車で国立と西荻窪の家を処分して自然の厳しい乗鞍に行くのはあまりにも無謀だった。移住を決めたものの、当時の乗鞍の決まりで自由

に家を建てることはできず、古い家を見つけそれをもとに建てなければならぬ。為治は村人から、番所の千石平にあばら家となった一間しかない小屋を借り受け、住むことにした。その家の様子を為治はこう書いている。「柱は傾き、雨は漏った。板敷きで、床板の下はすぐに土。天井もなく、畳もない。便所もなかったので、裏の軒先に穴を掘り、2枚の板を渡し、むしろで囲って作った。<sup>(63)</sup>」

移住に際してすべてのものを国立から乗鞍に運ぶ。物資のない時代だったため、くぎ一本も粗末にしなかった。風呂桶もミシンも分解し、こまごました日用品まで運ぶのである。しかし戦時下にあつて輸送方法も限られ、あらゆることを人力に頼らねばならなかった。丸通（現在の日通）と鉄道のチッキで何回にも分けて送るのだが、道路事情が悪く番所から約5キロメートル下の大野川までしか運ばれず、そこから番所までは為治と讃治が背負って運び上げた。引越したのが5月13日で片づけもままならぬうちに、開墾や種まきを始めなければならなかった。

引越してしばらくたったころ、大蔵大臣になっていた渋沢敬三が乗鞍の為治を訪ね一晩泊まった。渋沢はあまりのあばら屋ぶりに驚き、「僕もいろんなところに泊ったが、こんなひどいところに泊ったことはない。生まれて始めてだ<sup>(64)</sup>」と言った。この時のことを近所の人が回想する。「渋沢は何かの用向きで安曇村に来訪したのだが、その時白骨温泉の“湯元齋藤旅館”に宿泊するように手はずが整えられていた。しかし渋沢は近くに友人がいるからとそこを辞した。村人は友人とは誰のことかといふかったが、それが為治であることを知りみんなびっくりした。」

為治はそのあばら屋に1年半ほど住み、その後数百メートル上手、現在木立山荘がある場所に、乗鞍での最初の家を建てた。以前の家を思えばはるかに快適だったという。毎日為治は喜々として農作業に没頭し、乗鞍を「乳と蜜の流れる国」と重ね合わせる。

私は思いを未来に馳せませう。そこには明るい希望が待っています。

それは乗鞍独立王国の希望です。乳と蜜の流れる国です。麦や馬鈴薯や豆やキャベツや葱や大根や牛や山羊や綿羊や豚や兎や鶏や家鴨や林檎や栗や胡桃やすももや蜜蜂が、人といっしょに作る国です<sup>(65)</sup>。

1947年乗鞍に移り住んで2年目〔数え年で3年目<sup>(66)</sup>〕、為治は乗鞍独立王国に「乗鞍」という独自の年号を考え、この年から日記には、昭和の年号とあわせて、「乗鞍」を用いている。そしてこの王国の国花をスコットランドと同じくアザミに制定するのだった。しかしこの年号を定めた記念すべき「乗鞍3年」に王国の財政は破綻し、現金がまったくなくなってしまうのである。その頃の日記には「現金まったくなくなり、収入の道もなく、配給の米も味噌も買えぬようになり、困難に直面す<sup>(67)</sup>」と書いている。東京を離れる時国立や西荻窪の家を売った1万円はすぐに底をつき、恩給は戦後のインフレで大してあてにできなくなった。その時、渋沢敬三が1500円の金を用立てたり、讃治が進駐軍でアルバイトして金を送ったりした。当時、美治は自分で働きながら東京大学の医専に通っていたにもかかわらず、200円の大金を2度にわたって乗鞍に送っている。さらに為治は岩波書店から印税の前借りもする。渋沢は為治のために経済的な援助を惜しまなかった。為治自身はどんなに貧乏であってもさほど気にすることなく、誰にも干渉されない自由な生活を満喫していた。

5年目の1950年になると、思いがけなく多額の印税が入った。また恩給が大幅に増額された。為治はようやく窮乏の奈落から浮上することができたのである。そして家を改築し、ソファを置き国立と同じように西洋式の生活ができるようになった。

農業も熱心に研究している。アスパラガスなどの西洋野菜を初めて栽培し、それを求めて進駐軍がやってくることもあったようだ。またルバーブもアメリカから種を取り寄せ栽培しジャムを作った。長野の農事試験場に行き陸稲の種子を手に入れたり、羊の乳からバターを作る方法を明治乳業の工場で習うなど、精力的に研究もした。家の前に池を造って鱒を飼い、

畑ではいちごを作った。近所の人は「子どもの頃、よくいちごや鱒を取りに行った。特に鱒は、われわれの重要なタンパク源だった」と昔を思い出して話してくれた。

この頃から生活も以前に比べ少しずつ安定し、学問に目を向ける余裕が生まれてくる。乗鞍の環境は腰をじっくりと落ち着けてかからなければ完成できないような仕事に最適だった。そんな中で前述したバーズの改訳版の執筆がはじまり、後に『羅和对訳スピノザ倫理学』や『マルコ福音書の逐字訳を主体としたイエスの生涯とその教え』（山本書店、1966）に結実するギリシャ語やラテン語の翻訳も始めるのである。また農業への関心から、植物や農業に関する翻訳も数多く行う。野菜の作り方については細かく覚え書きを作り、禮治は今もそれを参考にして農業を行っている。1958年、高齢を理由に為治は農業を引退する。

1958年8月に日本カレドニア学会が創設された。座長の大和資雄から入会勧誘の書面を受け取り、創設趣旨に賛同。8月31日に発会式と第1回会合が学士会館で執り行われ、為治は乗鞍から参加した。上京の時はいつも雨合羽のようなものをまとい、天気がよくても悪くても長靴をはいていたと聞いたことがある。日本カレドニア学会創設については当時の『英語青年』の「片々録」に詳細な報告がある。

●日本カレドニア学会　スコットランドの言語、文学その他諸学の研究者の連絡親睦をはかる目的で日本カレドニア学会（Japan Caledonia Society）が誕生した。発会式は八月三十一日午後五時から、東京一ツ橋の学士会館において開かれた。大和資雄博士が司会をつとめ、学会成立までの経過報告があり、ついで学会の会則案を審議の上決定した。終了後、会員 Livingstone 氏の斡旋によって Festival in Edinburgh, Scottish Highlands などのスコットランド映画を鑑賞した。（中略）▲また同学会では会誌 *Caledonia* を出すことになり、その第1輯が出た。謄写版21頁。信州に住む Burns の中村為治氏は

「大学を出た次の年の夏休みに、神戸でバーンズの詩を訳しました。東京へ来てから、更にそれにつけ加えました。そして岩波書店に持っていったら、直に出してくれるという返事が来たので、私は喜びました。この本は今までに三万六千部出ているそうです。この有名な序文『私はバーンズを愛す……』は銀座のキリンビールでビールを飲みながら書いたものです……」という思い出を書いている<sup>(68)</sup>。

『英語青年』による学会誌への言及では、為治のことだけが取り上げられているが、恐らくこれは当時の学界が為治をバーンズ研究の第一人者ととらえていたことの証であろう。日本カレドニア学会は当初、ロバート・バーンズに関心を寄せる研究者が多く集まっており、為治は其中でも突出していた。学会の会員から耳にしたことだが、大和はよく、あるバーンズ研究者に対して「中村さんの研究をよく読みなさい」と激励叱咤していたという。大和は高く為治を評価していた。当時の英文学の泰山北斗、左右田実も然りである。

わたくしは、おりから、国立大の停年後の孤独感になやんでいたもので、喜び勇んで（日本カレドニア学会の）会合に参加して、知名の方々にお目にかかれるのが、何より嬉しかった。始めの頃は、市河博士、いつも遙々参会される山浦拓造教授、バーンズ研究の大家中村為治氏をはじめ、各流きらほしのごとくであり、（後略）<sup>(69)</sup>

学会の会員すべてが為治に一目も二目も置いていたのである。

その頃の乗鞍の暮らしを為治は『CALEDONIA』第3号の「会員消息欄」にこう書いている。「乗鞍の山の麓、おいしい空気、おいしい水、唐松の造林、白樺の自然林、三町歩の地主、荒れはてた畑、乏しい食物、静かな暮らし、ほしいものはオルガン、求めるものは優しい愛情。<sup>(70)</sup>」これは当時の為治の生活そのものである。為治はこのとき3町歩、すなわち約

9000坪の地主になっていた。オルガンは、音楽にも非常に造詣が深かった為治が乗鞍でバーンズのソングを弾こうとしたのではなく、万葉集の歌にあうような曲をオルガンを弾きつつ作ろうとしたものだった。後にオルガンを手に入れると、鹿持雅澄の『萬葉集古義』の歌すべてに曲をつけた。毎日毎日大きな声で歌を歌いつつ作曲していたと聞く。曲をつけた『萬葉集古義』は、『萬葉集古義乃譜』（全2巻）となり、1984年私家版として山本書店から出版された。その時に使ったオルガンは今も木立山荘にある。

為治自身の言葉を借りれば、「いやでいやでたまらなかった」教師生活に70歳の高齢になってから舞い戻ろうとは、予想もしなかったと思われる。岐阜県関市の中部女子短期大学（現、中部学院大学）の設立に伴い、請われて1967年4月から講義に出るようになった。美治によると、妻、孝に胃癌が発見され、まとまったお金も必要となるかもしれないと就職を決心したようである。

大学近くに宿舍が用意され、週に2、3日泊り込み、講義に通った。大学では紀要委員長、図書館長などを歴任した。授業の方法は東京商大時代と同じで、学生は当てずに一人で進めた。授業では自分の世界に浸りきっていたと聞く。バーンズの話はしたが、歌うことはなかったようである。5年6ヶ月勤めた。

1972年7月10日に妻が亡くなる。近隣の人々の話では、大して落ち込んだ様子もなく日々悠々自適に暮らしていたという。身なりをかまうことなく、着物を無造作に着込んで長靴を履き散歩をしていた。為治を知る人は、為治を奇人変人と言う。乗鞍の中村家は、共に開墾組合に参加した人たちが次々と土地を手放していくなか、自分の土地をしっかりと守っている。

為治は言う。

山で暮らしていると、空気はよく、景色はよく、日光は美しく、神經は無用に刺激されず、実に静かで、落付いていて、健康にいいので

す。先ずこの分で行ったら、いやでも百歳までは生きるだろうと思っ  
て、毎日を急がずに休まずに愉快地に過ごしている次第です<sup>(71)</sup>。

1988年冬、コタツで臀部を大やけどして、松本の病院に40日あまり入  
院する。このやけどが原因となり体調を崩し、寝込むことが多くなってい  
く。100歳まで生きるつもりだったが、わずか7年及ばなかった。1991年  
6月30日、波瀾万丈の人生に幕を閉じた。享年93歳。為治は語りかける。

バーンズよ、お前は今何処にいるのか、お前は心の貧しい者であっ  
たから、きっとあの幸福な国<sup>さいわい</sup>に行っているに違いない。そこで待って  
いてくれ。私も行くから<sup>(72)</sup>。

## 6. 終わりに

晩年為治はこう言っている。「バルンズなどは日本中の誰よりも自分が  
よく読んだとひそかに自惚れていたが、今考えて見てもそれはその通りで  
あると思う。<sup>(73)</sup>」これは当たっているだろう。バーンズの難解なスコツ  
語や複雑な詩を、バーンズの心情を理解しつつ正確に読むことができた日  
本人は為治くらいただだろう。バーンズを初めて知ったのは1913年、  
為治が15歳の時だった。それから亡くなるまでゆうに80年近くをバーン  
ズとともに生きた。また45歳で東京商大を辞め、家族を引き連れ乗鞍に  
移り住み、バーンズと同じ貧しい農夫の生活を亡くなるまで続けた。為治  
がスコットランドの地を訪れたことはない。しかし、乗鞍に住み、スコツ  
トランドの生活を想像しながら暮らしたことだろう。乗鞍に移住し自給自  
足の生活を送ったこととバーンズの研究とは何か大きなつながりがあった  
のではないだろうか。5月の乗鞍はすばらしいところだった。為治は乗鞍  
を心から愛した。バーンズが祖国スコットランドを愛したように。  
「思うは永遠、生きるはよろこび、あるは満足」為治のモットーである。

註

- (1) 中村為治訳『バーンズ全訳詩集』全2巻, 角川書店, 1959
- (2) 1958年大和資雄を座長に, 高橋豊秋, 難波利夫, 小牧英幸らによって設立されたスコットランド文化全般を研究する者の組織。
- (3) 現在の国立市
- (4) 中村為治『楽しい自叙伝』山本書店, 1986 B5変型判, 上下2段組, 875ページ, ハード・カバー。原稿用紙に手書きで書き込んだものをそのまま印刷してある。(以下、『自叙伝』と略す)
- (5) 手塚晃編『幕末明治海外渡航者総覧』第2巻, 柏書房, 1992, p.152
- (6) 『自叙伝』p.283
- (7) 山口徹(本文・後出)によれば, 一橋大学西キャンパスの南西の端で住所は現在の国立市中2丁目15番地の大学寄りの角地付近である。
- (8) 国立学園の校歌は以下のとおりであるが, 学園で現在歌われている歌詞は旧仮名遣いを現代仮名遣いに直したり, 一部かなを漢字に直したりしている。
  1. 国立の我が学園は／松林, くぬぎの林／春の日に小鳥来てなき／夏の日に緑のこかげ／秋の日にもみちば紅く／冬の日に日ざしうららかに
  2. 国立の我が学園は／松林, くぬぎの林／ここによき師の君達は／我等をば教えはぐくむ／限りなき慈愛の眼／朝夕に我等導く
  3. さればこのよき学園に／学ぶさちうけし我等は／ちゑすすみ身も健やかに／いと強く直く正しく／幼き日うれしくすごし／よき人と生い立ち行かむ(中村為治作詞, 加藤為三郎作曲)——『自叙伝』巻頭の写真集より
- (9) 中村為治訳『抒情英詩集』研究社, 1927
- (10) 山川喜久男「英語——一橋英語百年の歩み——」『一橋大学創立百年記念——一橋大学学問史』一橋大学学園史刊行委員会, 一橋大学, 1986, p.1107
- (11) 小峯柳多「一橋数え歌」『国立・あの頃』国立パイオニア会編, 1972, p.324
- (12) 立石信吉「中村先生の思い出」『「一橋専門部教員養成所史」への回想—追補と思い出—』一橋大学学園史編纂事業委員会, 1983, p.167
- (13) 中山舜吾「思うは永遠, 生きるはよろこび, あるは満足—自然人中村為治翁のモットー」『「一橋専門部教員養成所史」への回想—追補と思い出—』p.169

- (14) 成田安清「国立の懐い出断片記」『国立・あの頃』 p. 231
- (15) 品川哲山「思い出ずるまま」『国立・あの頃』 p. 284
- (16) 『自叙伝』 p. 298
- (17) 『星の王子さま』（岩波書店）の翻訳者として有名。
- (18) 『自叙伝』 p. 313
- (19) 山川喜久男, p. 1107
- (20) 横山健之輔「回想つれづれ」『波濤 東京商科大学学部昭和十六年後期卒業生卒業四十周年記念文集』十二月クラブ編, 1981, pp. 468-469
- (21) 羽深知治「中村為治先生の英語」『「一橋専門部教員養成所史」への回想—追補と思い出—』 p. 168
- (22) 松尾弘「国立の思い出」『国立・あの頃』 p. 240
- (23) 1939年ころより定年制を布く動きが起こってきた。1936年から1940年まで学長を務めた上田貞次郎の日記『上田貞次郎日記 大正8年—昭和15年』（慶応通信, 1963）には、昭和14（1939）年2月5日に次のような記述がある。「幸田成友氏を訪ひ、予科教授辞職を求めた。予科及専門部には定年制はないけれども、あまり老教授が多くなっては宜しくないと考え、昨年は杉山令吉氏を辞職せしめ、今年は幸田、峰間（両氏とも66歳）両氏をやめさせることにしたのである。両氏とも健康なので、喜んで辞する意向はなかったが、結局程々の条件の下に辞職を承諾した。これで予科、専門部にも65歳位で引退の先例が開けたものと思う。」（p. 322）
- (24) 『自叙伝』 p. 489
- (25) 『自叙伝』 p. 298
- (26) 後年中部女子短期大学に勤めるがここでも教授会は苦手だったようである。することがないので先生たちにお茶をついで回ったと聞くと教え子の一人が語ってくれた。
- (27) 『自叙伝』 p. 284
- (28) 『自叙伝』 p. 310
- (29) 『自叙伝』 p. 488
- (30) 佐々木高政「あの頃のこと—山田和男教授点描—」『一橋論叢』第62巻第5号, 1969, p. 91
- (31) 『自叙伝』 p. 525
- (32) 『自叙伝』 p. 310
- (33) 中村為治「バーンズについての思い出」『CALEDONIA』1号, 日本カレ

- ドニア学会, 1958 年, p. 9
- (34) バーンズのこと。禮治によれば、為治は 1970 年代終わりのころからロバート・バーンズのことを「ロバルト・バルンズ」と呼ぶようになった。実際スコッツ語の原音で Robert Burns を発音すればこれに近い。
- (35) 『自叙伝』 p. 220
- (36) 高梨健吉・出来成訓監修『英語教科書名著選集 第 7 巻 National Readers—5—』大空社, 1992 p. 282
- (37) Ibid., p. 286
- (38) 『自叙伝』 p. 220
- (39) 『自叙伝』 p. 264
- (40) 中村為治「バーンズについての思い出」『CALEDONIA』1号, p. 9
- (41) 『自叙伝』 p. 292
- (42) 中村為治訳『バーンズ全訳詩集』第一部, 角川書店, 1959 年, p. 3
- (43) 2007 年 9 月 25 日現在の数字である。2003 年時点では 18 刷で品切れ状態が続いておりそのときまでの販売部数は約 40000 部であった。したがって現在でも年間 1000 部近くは出ているようである。
- (44) 中村為治訳『バーンズ全訳詩集』第一部, p. 3
- (45) Sanki Ichikawa “CONGRATULATIONS!” 『CALEDONIA』3号 (Spring), 日本カレドニア学会, 1959, p. 2
- (46) 東浦義雄「カレドニア学会の歩み」『CALEDONIA』復刊第 1 号, 1968 年, 日本カレドニア学会, p. 2
- (47) 穂積陳重, 阪谷芳郎は渋沢栄一の女婿にあたる。敬三から見ればおばの夫である。前者は法学者で枢密院議長, 後者は大蔵大臣。
- (48) 中村為治訳『バーンズ全訳詩集』第一部, p. 3
- (49) <http://homepage3.nifty.com/~hispider/waruiyaku.htm>
- (50) 中村為治訳『抒情英詩集』研究社, 1927, 「序」
- (51) 中村為治訳『ヴィクトリア朝の抒情詩』泰文堂, 1929, p. 1
- (52) 中村為治訳『バーンズ全訳詩集』第一部, p. 5
- (53) James Kinsley (ed.), *The Poems and Songs of Robert Burns*, vol. 2, Oxford University Press, 1968, p. 557
- (54) 中村為治訳『バーンズ詩集』岩波書店, 1928 年, p. 9
- (55) 中村為治訳『バーンズ全訳詩集』第一部, p. 23
- (56) <http://www6.ocn.ne.jp/~seizan/>

- (57) 中村為治「山で暮らす」『文庫』2-1954, 岩波文庫の會, 岩波書店, 1954, pp. 14-15
- (58) 中村為治「初秋の乗鞍山麓」『アルプ』第247号, 1978, p. 66
- (59) [http://www.asahi-net.or.jp/~fc4t-skri/file02\\_main\\_material/file02\\_08\\_syomoku2.html](http://www.asahi-net.or.jp/~fc4t-skri/file02_main_material/file02_08_syomoku2.html)
- (60) 中村為治「初秋の乗鞍山麓」『アルプ』第247号, p. 66
- (61) 中村為治「Johnson's The Scots Musical Museum」『CALEDONIA』3号 (Spring), p. 16
- (62) 『自叙伝』 p. 504
- (63) 『自叙伝』 p. 557
- (64) 『自叙伝』 p. 540
- (65) 『自叙伝』 p. 565
- (66) 為治は数え年で計算していた.
- (67) 『自叙伝』 p. 576
- (68) 「片々録」『英語青年』第104巻第10号, 研究社, 1958年, pp. 608-609
- (69) 左右田実「『カレドニア学会』の恩恵」『CALEDONIA』学会10周年記念号, 1968年, p. 31
- (70) 「会員消息」『CALEDONIA』3号 (Spring), p. 46
- (71) 中村為治「山で暮らす」『文庫』2-1954, p. 15
- (72) 中村為治『バーンズ』研究社 英米文学評伝叢書, 「序」1934
- (73) 『自叙伝』 p. 310

中村為治年譜

西暦	年号	月日	事項
1862	文久2	2. 28	父, 文治誕生
1876	明治9	3. 19	母, 糸い誕生
1898	31	1. 17	為治誕生
1901	34	10. 10	未来の妻, 山添孝(コウ)誕生
1904	37	4	東京高等師範学校附属小学校入学/姉と英語をネイティブの先生から習い始める
1910	43	4	東京高等師範学校附属中学校入学

1912	大正 1		この頃から内村鑑三を愛読し始める
1913		2	バーンズの名前を初めて知る
1915		4 8.13	オックスフォード版のバーンズを丸善で買う
1916		5 9	一高入学（一年の浪人その後）
1917		6 夏	内村鑑三の那須の夏期集會に神田盾夫と参加
1918		7	留年して二度目の2年生／明石町から牛込・北山伏町に引っ越し／ 内村鑑三の聖書研究会に出るようになる
1920		9 4	東京帝国大学入学
1921		10	黒崎幸吉編『靈交』誌の編集を手伝い、自らも記事を書く
1923		12 3	東京帝国大学卒業
		4	甲府中学校に就職
		7.31	ク 辞職
		8.30	山添孝と結婚
		9.1	神戸関西学院就職、関東大震災（震災後に東京の家は小日向台町から 高田豊川町に引越し）
		9.6頃	神戸に発つ
1924		13 6.7	長男、譲治（サンジ）誕生
			東京商大、関東大震災のため一ツ橋より石神井の仮校舎に移転
1925		14 夏	バーンズ訳す（昭和3年岩波より出版）
1926		15 4.1	東京商大専門部・予科講師（4.10教授）目白の高田豊川町に住む
		11.16	次男、美治（ハルジ）誕生
1927	昭和 2	4	東京商大専門部一橋から国立に移る／西荻窪の同潤会に住む
		9	最初の著書『抒情英詩集』（研究社）出版
1928		3 2	渋沢敬三主宰の「アチック」例会に上原専禄と参加（為治は昭和6 年6月まで参
		6	『バーンズ詩集』（岩波書店）出版
		夏	西荻窪・同潤会の近くに家を建てる
		11.13	三男、禮治（レイジ誕生）
1929		4 9	『ヴィクトリア朝の抒情詩』（泰文社）出版
			『キプリング詩集』（梓書房）出版
1930		5 4	東京商大専門部を退き予科専任の教授となる
1931		6 4	長男、国立学園小学校入学
1932		7 1	「ギリシャ語練習組合」を組織し、神吉三郎、福島直四郎、上原専 禄、予科学生達と週1回ギリシャ語の勉強をする

		4	次男，幼稚園代わりに国立学園小学校に入れてもらう
		5.7	国立に家建て引越す
1933	8		東京商大予科石神井から小平に移転
1934	9	5	『バーンズ』（研究社英米文学評伝叢書）出版
		6	『闘技者サムソン』（岩波書店）出版
1935	10	2.11	国立学園の校歌歌詞公募に応募し1等当選，校歌に採用される
1936	11	5	『キップリング詩集』（岩波書店）出版
1937	12	1	『ジャングルブック』（岩波書店）出版
		4	長男，東京高師附属中入学
		秋	学校視察のため，関西方面旅行
1939	14	夏	茨城県内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所に指導教官として入所後，一ヶ月間満州で集団勤労作業に従事
1940	15	夏	奉天滞在
1941	16	2	『ハックルベリイフインの冒険（上）』（岩波書店）出版
		5	『ハックルベリイフインの冒険（下）』（岩波書店）出版
		夏	天津・北京に教育視察
1942	17	秋	国民精神文化研究所に3ヶ月間研究生として通う（「嘘で固めた国民精神文化であった」）
			一高より就職の誘いがある
1943	18	10.30	商大依願退職
			土光敏夫の依頼で石川島芝浦タービンに入社
1944	19	1	土光とけんか，タービン辞職
		2	渋沢敬三の弟の世話で東京製綱熊谷工場嘱託となる（農業に従事）
		10.30	姉，和嘉子死去
1945	20	3	東京製綱熊谷工場退職
		3.26	父，文治死去
		4	西荻窪と国立の家を売り，乗鞍岳山麓の番所千石平に家を借りて住む
		夏	渋沢敬三の訪問を受け，一泊する
		11	中の湯温泉で越冬のアルバイト（翌4月まで）
1946	21	11.3	番所千石平から約500メートル上手に最初の家を建てる（現在の木立山荘がある場所）
		12.5	山羊を飼う
1947	22		アメリカの農業入門書訳す（未出版）

1948	23	2	附属の後輩, 長谷川光二を北海道に訪ねる／渋沢敬三にトラックを買ってもらう／開墾組合に参加
1949	24		渋沢の助言により三重県・桑名の農場を視察
1950	25		多額の印税が入り家の改築にかかる
1951	26	春	ダーウィンの『種の起源』の翻訳を始める (未完)
1954	29		バーバンク『植物の育成』の翻訳を始める
1955	30	2	『植物の育成』第1巻 (岩波文庫) 出版 (1962年6月全8巻完結)／カレル『人間一知られていないもの』を翻訳し岩波書店に持ち込んだが、出版に至らず
1958	33		農業を止める
		8.31	日本カレドニア学会第1回会合に出席
1959	34	1	『バーンズ全訳詩集』(角川書店)／プリティッシュ・カウンシルより <i>The Scots Musical Museum</i> を借り筆写を始める
1961	36	6.7	長男譲治, 東京・お茶の水で交通事故死
		11	『英米文学史講座第6巻18世紀』(研究社)に「バーンズ」執筆
1965	40		『キリスト伝』書き上げるが、出版されず
1966	41		『イエスの生涯とその教え』(山本書店)出版
1967	42	4.1	中部女子短期大学(岐阜県・関市)勤務(教授)
1970	45		妻, 胃癌で埼玉県病院に入院
1971	46	1.13	母, 急死
		6	家を新築
1972	47	7.10	妻, 孝死去
		9.30	中部女子短期大学退職(本来3月31日付だったが本人の申し出により9月30日まで延長)
1979	54	8	『羅和对訳スピノザ倫理学』(山本書店)出版
1984	59	12	私家版『ロバルトバルンズ 歌と詩と手紙』(山本書店)全4巻出版
1986	61	8	私家版『楽しい自叙伝』(山本書店)出版
1988	63	冬	臀部におおやけど(40日あまり入院, このやけどが原因で体調を崩す)
1991	平成3	6.30	逝去享年93歳

付記：本稿を執筆するに当たり、中村為治在任中の東京商科大学について、元一橋大学学術史資料室スタッフ松村美子氏から貴重な資料、情報をご提供いただいた。この場を借りて謝意を表したい。